

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 22 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520362

研究課題名(和文) ロドルフ・テプフェールにおける物語技法と領域横断的表現の関係

研究課題名(英文) Rodolphe Topffer's Narrative Devices and his Cross-media Writings

研究代表者

森田 直子 (MORITA, NAKO)

東北大学・情報科学研究科・准教授

研究者番号：40295118

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円、(間接経費) 420,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、絵物語という新しい複合的物語メディアを生み出した19世紀前半のジュネーヴの作家R.テプフェールをとりあげ、物語メディアの歴史の一端を明らかにした。彼は絵物語固有の表現手段を生かした物語技法を編み出したが、それは小説と演劇、正統絵画と素描における「ミメシス」についてのテプフェールの理論と実践に支えられていた。さらに彼が、国民アイデンティティの形成、読書実践の変容などを背景とした図像キャラクターの有用性を提示したことは、今日的観点から重要である。

研究成果の概要(英文)：Our research aims to examine the invention of a new medium "histoires en estampes", today called "comics", by a 19th century Genevan writer Rodolphe Topffer as a crucial point in history of narrative media. He made use of new narrative devices based on the formal specificities of comics. His experiments in the new medium were profoundly inspired by his reflections on "mimesis" in different arts, from the most legitimate genres (as academic paintings) to the most popular and marginal (as caricatures). We also highlighted the fact that Topffer was one of the first to suggest the usefulness of visual character or hero, taken from well known stories but made autonomous, in relation to the growing consciousness of national identity and the development of reading culture of the period.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学；ヨーロッパ文学(英文学を除く)

キーワード：ロドルフ・テプフェール スイス・ロマン文学 絵物語 物語メディア 観相学

1. 研究開始当初の背景

ロドルフ・テプフェール(Rodolphe Töpffer, 1799-1846)は、19世紀ジュネーブを代表する作家で、教育者・政治家としても活躍した人物である。その表現活動は、小説や美術批評から挿絵入り旅行記、さらに「版画物語」という呼称で知られる絵物語まで、多岐に渡っている。

テプフェールは、スイス・ロマンド(フランス語圏スイス)という概念の成立に深くかかわった作家である。その著作のうち、国際的には、架空の登場人物の冒険を絵と文で描いた「版画物語」7作品が「コミックス」の原型をなすものとして1950-60年代以降、欧米において特に注目を集めてきた。これは1ページあたり横一列に2~3コマの線描画が並び、その下にキャプションが置かれ、1作品50~100ページほどの横長の版型の単行本である。記号論の隆盛のなかで、表現形式に重点をおいた研究が多く現れた一方、美術史と社会史のなかにテプフェールを位置づけたD・カンズルによる研究はテプフェール研究に新たな境地を開いた。作家の死後150年(1996年)前後にテプフェール研究は飛躍的に進展し、19世紀視覚文化との関係でコミックスの表現の系譜を跡付けたグルンステンとペーテルス『漫画の発明』(1994)、多岐にわたるテプフェールの創作活動を文化史的に位置づけた共同研究『テプフェール』(Boissonnas et al., *Töpffer*, 1996)などが世に出た。また、カンズルは絵物語全作品の校訂・注釈つき英訳およびモノグラフィーを2007年に刊行し、テプフェール研究に大きく貢献したが、その分析は社会文化史の観点の主である。こうした現状において、ジュネーブという地域性と同時代のパリの出版文化を視野に入れた版画物語の位置づけと、洒落なユーモアと哲学的諷刺を特徴とする絵物語のテキストについては、解明されるべき

点が多く残されていた。

本研究代表者は以前、テプフェールの作品のうち、絵物語を自ら小説に翻案するという実験の場となった『フェステュス博士』(小説と版画物語いずれも1840)及び版画物語第一作である『ジャボ氏』(1833)における、文と図像から構成される物語技法や諷刺のありかたについて、解明を試みた。その結果、テプフェールの絵物語が前提としている文化的遺産(文学、美術史、演劇論、同時代風俗・政治)の複雑さが非常に興味深いものであることがわかった。さらに、文学者にとってのジュネーブという「場」の意味について明らかにすることができれば、物語ジャンル間の干渉の歴史的研究、フランス語圏文学研究に新たな光を当てることになるのではと考え、本研究の着想に至った。

2. 研究の目的

本研究の目的は以下の3項目にまとめられる。

(1) R.テプフェールの絵物語(版画物語)で用いられた物語技法を解明する。『フェステュス博士』『ジャボ氏』に引き続き、さらに他の5作品の物語技法についても注釈を試みる。「物語」という形式のメディア横断性についての関心が高まっている今日、テプフェールにおける物語技法の源泉を明らかにすることで、小説・絵画・演劇などのメディアの違いを超えた「物語」というジャンルの歴史記述に貢献したい。そのため、全作品の注釈つき日本語訳復刻を刊行することを将来の目標とし、本研究をその下準備とする。

(2) テプフェールの物語技法と、領域横断的表現との関係を解明する。テプフェールは、当初画家を志望したのちに文学者に転向したため、表現メディアの違いに敏感であった。テプフェールの「ミメシス」をめぐる問題意識については以前の研究で解明を試みた

が、本研究ではさらに小説や戯曲における物語技法との関連を解明する。また、テプフェールの絵物語を諷刺画（カリカチュア）の歴史と諷刺（サタイア）文学の系譜の観点から明らかにし、文学研究と関連隣接分野との融合、対話を促進する。

(3) テプフェールのヨーロッパ的教養と、パリおよび国民国家形成期のジュネーヴの状況との関係について、以前の考察をさらに充実させる。地理的にフランスに隣接しているためか、従来フランス語圏文化の問題として取り上げられることが比較的少ないジュネーヴ固有の歴史的事情に焦点を当て、フランコフォニーをより多面的に論じるための新たな視点を導入するという意義もある。

3. 研究の方法

テプフェールの絵物語（版画物語）全7作品における、文と絵による語りの特徴の多面的な分析を行うために以下の手順で研究をすすめた。

(1) イギリスの諷刺画やスターンを中心とするイギリス文学、18世紀の美学・観相学・俳優演技論からの影響の痕跡を明らかにした。

(2) テプフェール自身の小説・美術批評・旅行記・戯曲作品とのテーマ、文体、物語技法上のつながりを、理論的テキスト（草稿を含む）と創作作品との関連を精査することで明らかにした。

(3) 同時代のフランス出版文化、ジュネーヴの文化的風土とテプフェール個人の資質に由来するものを見極めつつ、絵物語の総合的な分析に集大成させ、研究成果を公開した。

4. 研究成果

(1) まず、テプフェールの絵物語における人物の顔としぐさの表現技法全般について、身

ぶり・しぐさのコードに関するD.ディドロやラヴァーター、J.-J.エンゲルらの美学的議論との関連を分析した。その成果は、論文「R.テプフェールの版画物語における身ぶりを論じるための予備的考察」にまとめた。

(2) テプフェールの絵物語に共通する喜劇的メカニズムに近代小説的な内面表現が加わった晩年の傑作『アルベール物語』を題材として、物語技法の分析を行った。身ぶり表現の熟練に加え、人物の見かけによる物語の牽引、図像による修辭的表現、キャプションと図像のすれによるユーモアなど、それまでに作家が開拓した絵物語の技法の集大成を確認することができた。

(3) 身ぶり表現と並んで、テプフェール詩学の基本原理となっている顔の描画法について、『観相学試論』の翻訳と解題の作成を通じて考察、理論と応用の関係についての作家の思考過程の一端を明らかにした。テプフェールは観相学という知の体系を現実の再現・描写という観点と切り離すことで絵物語の詩学に転用することに成功した。その背景をまとめると、カリカチュアの描画法を美学的観点から擁護する思想、18世紀にイギリス等で見られた、物語のキャラクター受容の独特な様式（登場人物を図像化して想像したり、作品から自立させて別作品で再利用したりする傾向）、感情表現の視覚的レパートリーの広範囲の普及などがあげられる。

(4) ジュネーヴ美術歴史博物館での調査により、テプフェールが絵物語を最初から数十ページの本の形で構想したことがわかった。刊行にあたっての「転写石版」という特殊な印刷法と、横長フォーマットの選択も含め、絵物語のメディアとしての様相が、テプフェールの物語技法とも深いかわりを持つことが明らかになった。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者に

は下線)

〔雑誌論文〕(計 4 件)

1 .

森田直子「『アート・スピーゲルマン プライベート・ミュージアム展』について」、『ナラティヴ・メディア研究』第4号、2013年3月、9-14ページ。査読なし。

2 .

森田直子「新しい物語メディアの作り手、テプフェール」『ユリイカ』(総特集世界マンガ大系)、2013年3月臨時増刊号、75-83ページ。査読なし。

3 .

森田直子「テプフェール晩年の知られざる傑作『シモン・ド・ナンチュア作 アルベール物語』」『O-M L'ŒUVRE-MONDE』2011-2012年度号、学習院大学大学院人文科学研究所共同研究プロジェクト「社会のカタログ化と文学」2012年3月、109-123ページ。査読なし。

4 .

森田直子「R.テプフェールの版画物語における身ぶりを論じるための予備的考察」『O-M L'ŒUVRE-MONDE』2010-2011年度号、学習院大学大学院人文科学研究所共同研究プロジェクト「社会のカタログ化と文学」、2011年3月、35-52ページ。査読なし。

〔学会発表〕(計 3 件)

1 .

森田直子、「Rodolphe Töpffer(1799-1846)における顔としぐさの修辞学」「現代視覚表象におけるメディア的身体」研究会、2014年2月8日、山形大学人文学部。

2 .

森田直子、「アルバムと本のあいだ ロドルフ・テプフェールの「版画物語」の出版形態」ナラティヴ・メディア研究会第17回「本という建築」、2014年2月3日、東北大学大学院文学研究科。

3 .

森田直子「地動説とユートピア文学」日本比較文学会北海道支部・東北支部共催第二回比較文学研究会、2013年3月16日、仙台市青年文化センター。

〔図書〕(計 2 件)

1 .

T.グルンステン、B.ペータース(訳・解題 古永真一、原正人、森田直子)、法政大学出版局、テプフェール マンガの発明、2014、151-226。

2 .

ロドルフ・テプフェール(訳・解題 森田直子)、オフィスヘリア、復刻版 観相学試論、2013、77。

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計 件)

名称:

発明者:

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6．研究組織

(1)研究代表者

森田 直子 (MORITA NAOKO)

東北大学・大学院情報科学研究科・准教授

研究者番号：4 0 2 9 5 1 1 8

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

森本 浩一 (MORIMOTO KOICHI)

東北大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：2 0 1 8 2 2 6 4